

ラテン・アメリカの冠婚葬祭

ミス〇〇への関心度

歴史は女性の美によって動かされてきた？

時代は変わり国は変われども、世の男性の“美しき女性”への関心度は変わることはない。「歴史は女性の美によって動かされてきた」という“自称歴史学者”もいるが、ラテン・アメリカで見る限りよい線をついていると私も思う。

「クレオパトラの鼻があと△センチ低かったなら、今のエジプトがあり得たかどうか・・・」

「もし唐の玄宗皇帝の前に楊貴妃が現れなかったら、人口10 余億の現代中国の歴史の流れまで変わっていたであろう」——といった様々の仮想もたつ。



ここでもっと現実的な視点から現代の産業史を分析してみても、女性の衣服、装飾品、化粧品等に関連する産業また職業が急速に伸びていることがわかる。最近では下着にも脚光が当たってきている。これは世の男性が、そして女性自身が抱く“女性よ美しくあれ”との強い願望の表れといってもよいだろう。

その頂点にある一つが「ミス・ユニバース」(スペイン語では「セニョリータ・ユニベルソ」)コンテストであろう。このコンテストに対し、一部の女性運動家から「これは女性の人権を軽視したもの。女性を男性の愛玩具とみたてた女性蔑視だ」と反対の声もあがっているがミス・ユニバース等に対するラテン・アメリカ人の関心度は、日本人のそれをはるかに越えているように思う。

——たまたま出張でベネズエラに滞在中のことだった。「ミス・ユニバースの栄冠がベネズエラ代表に！」——こんなニュースがラジオ・テレビに流れた。ふだん政治や国際的な硬い報道で占められている一流紙の1面にも、日本の新聞でいえば“4段抜き”扱いのミス・ユニバースの記事が大きな写真入で載った。この時、ベネズエラは前年に続き2度目の栄冠だった。

「なんてたっておいらの国は、石油ばかりか美人の産地でもあるからネ」
道路わきまで出たレストランでビールのジョッキに手をかけた口ひげの中年紳士は、自慢げにこう言うと一息に飲み干した。

ベネズエラに限らず、一般にラテン・アメリカではグラマーな美人が目につく。こんなことを書くと女性読者から「聖教新聞の特派員にしてハシタナイ！」と投書でもいただきそうだが、かつてA紙の特派員がそれをいみじくも表現していた。

「一般にラテン系の女性は、ドアから入ってくる時、まず巨大なオッパイから入ってきて、帰るときは突き出たお尻が最後に出ていく」——言い得て妙である。かようにこちら

の女性は一般に早熟でもあるのだ。

「キンセアニューラ」との儀式がある。これは少女が満 15 歳を迎えたことを祝うもので、ときにローカル紙には本人のプロマイド風の写真が大きく載り、盛大なパーティが開かれる。娘の“成人”のお祝いなのだ。パーティではまず最初に父親と組んでダンスを踊る。一方、1 人のノビオが指定されている。一般に彼女の恋人またはこの日、彼女のエスコート役を務める若者のことである。彼女にとっては社交界へのデビューのチャンスでもある。

誕生パーティもこれまたさかん。「誕生日おめでとう。あなたの人生に成功が輝きますように！」。こんなスタイルの記事で大のおとなが新聞紙上に顔写真入で祝われる。

幼児の誕生パーティでは「ピニャタ」が伝統的に行われている。これは動物や魚あるいは宇宙人など子供に人気のある題材をダンボールで形どり、なかに菓子やおもちゃを入れ、紐で吊るし、パーティに集った子供たちが順番に棒で打ちたたくもの。割れて中身が飛び出すと、それを競って拾い集めるのである。ただしこれらの行事は、一般に上流階層の家庭が主流となるが、元来がパーティ好きのラテン・アメリカ人のこと、下層階層の人もまたそれなりにパーティを楽しむのである。

ともあれ、ミス・ユニバースに限らず、ラテン・アメリカでは広い意味での「冠」にあたる行事がことのほか多い。先の「大学のキャンパス」の項で触れた「レイナ(女王)」をはじめ「ミス△△ハイスクール」「ミス〇〇銀行」「ミス××組合」……とその都度、栄冠を勝ち得た美人の写真が新聞に大きくあらわれる。歴史は時代と社会の女性美への関心を映し出しながら流れている。コンテストが女性蔑視などという意見は、こちらでは遠くに消え隠れてしまいそうな風情なのである。

結婚式はアツアツで

参列者全員が伸び伸びと自由に楽しむ



何組か一緒での仏式結婚式

パナマでメンバーの結婚式に招かれた。花嫁は 20 歳。私がパナマに赴任したころは、まだ可愛らしい中学生だった。だがいつの間にか成人していた。15 歳でキンセアニューラの儀式を行う土地柄である。女性としての成熟度も日本より早いのであろう。パナマ市内にあるアメリカ系の短期大学を卒業した彼女は、結婚後は夫のいるアメリカのルイジアナ州の大学で主婦業を兼ねながら女医を目指して勉強を続けるという。

花婿は外科医。28 歳。彼女から仏法を紹介されて半年前から信仰に励んでいた。共に黒人のメンバー。蝶ネクタイのタキシードと純白のウエディングドレスがよく似合っていた。「どうしても仏前で！」——2 人のたつての希望で、結婚式は仏式で挙行された。

緊張のなか慣れない手つきで三々九度の杯をとる花嫁の細い手が心なしか震えていて感

動的だった。

ところが——。厳肅さもここまで。式が終わるやいなや、しかと抱き合った 2 人は、参列者の面前もかまわず熱いキスを交し合ったのである。記念写真にも、なんのてらいもなくアツアツのポーズを見せつけていたのだった。

もちろん、日本の若者たちも最近ではこれ以上のアツアツ振りを発揮しているカップルもないことはない。だが、それが本当に一般化しているかどうかとなると、洋画やテレビの影響で、男女間の愛情表現が相当に開けてきたとはいえ、こちらに比べればまだぎこちない面がかなり目につく。

これは結婚への手段としての「見合い」が今なお、かなりのパーセントを占めていることにも起因していよう。こちらではいわゆる日本式の「見合い」のシステムはほとんどない。10 代後半からすでにノビオ(男性の恋人)、ノビア(女性の恋人)として付き合う社会風潮がその必要性をもたらさないのかもしれない。

さてその結婚式だが、キリスト教徒が大部分のこちらの挙式は、一般的にはやはり「教会にて」が主流である。お祈りのあと神父の言葉、指輪の交換……ここまでは宗旨の違いを除いてほぼどこも同じである。だが、披露宴ともなると、いかにもラテン・アメリカ的風土の違いが映り出てくるのである。

「次は、ご多忙のなかわざわざこの日のためにご参列くださった国会議員の××先生にご祝辞をいただきたいと思えます」などと、新郎の学業優秀、品行方正をこそばゆいばかりにたたえるような形式ばった祝辞はない。夜であれば 10 時、11 時は宵の口。午前零時、時には明け方近くまで激しいリズムに合わせて踊るのである。かくして出席者の全員が伸び伸びと自由に楽しむ雰囲気は実によい。

パーティのさなか、花嫁が贈られた小さな花束を持って席をはずすと、会場に居合わせたセニョリータ(未婚女性)全員がそれに続く。やがて広い場所まで出ると、花嫁は前を向いたままポイと後方高く花束を投げ上げる。セニョリータたちは落ちてくる花束めがけて我先にと“突進”する。

「フェリシタシオネス(おめでとう)！」

しっかと花束を握りとった 1 人は皆かはあなたの(結婚の)番ヨ」。花束獲得は、こ実らせる吉瑞だというのである。なかなか。



らこう祝福される。「今度の日の花嫁に続いて恋を楽しいユーモアではない

さて、日本も秋の結婚シーズン。こちらに届く新聞に「式の費用がウン百万円、親のスネ細る」「こちらが祝辞を述べようとするのに、花嫁が何度もお色直しに立って席にいない」「日本では新婚の夫婦が逆に訪問客にプレゼント(引き出物)をあげているが……」(在日外国人の声)と慣習の違いが述べられているが、なるほど、こちらの結婚式と比較して考えさせられる点も多い。

一方、「ふだんあまり信仰心のない若者が“にわかクリスチャン”となってスイスの教会

で結婚式」との揶揄調の記事も目にする。異国風のロマンチズムがなんとなく格好よく見えるのだろうが、本来あるべき信仰心、宗教の純粋性から見れば、これは甚だ滑稽であり、宗教の冒涇でさえあろう。そこはかたない西欧風の形式への憧れ——かつての“脱亜入欧”の影がこんなところにも映り出ているのかもしれない。

どうして香典なの？

死者を悼む心情は世界どこでも共通だが・・・

ジュリエット——「ここにあるのは何かしら？ コップかしら、私の真実の夫の手に握られているのは。あ、わかった。毒薬が夫の非業の死の原因となったのだ。おお、ひどいお方だこと！ みんな飲んじゃって。私に後を追わせてくれる親切な毒を一滴も残しておいてくださらなかったの？ あなたの唇に接吻しましょう。多分、いくらかの毒がまだそこに残っていて、気付けの薬効でもって、私を死なしてくれるかもしれないから」(接吻する)・・・(「ロミオとジュリエットの悲劇」——本多顕彰訳)

青春期の私の心を豊かな情操で満たしてくれた名作のクライマックスである。一度死んだはずのジュリエットが生き返る。そこから物語は更に悲劇へと展開していく——。

イギリスの大文豪シェクスピアを論ずる才はとてもないが、冠婚葬祭という視点からやや突飛な推測を許してもらえば、もしこれが土葬でなく火葬だったら、あの世界の若者の心を捉えた恋愛悲劇のストーリーは生まれ得なかったであろう。



イギリス(英国教会)のみならず、ラテン・アメリカ(カトリック)も、宗教は宗派こそ異なれ共にキリスト教を源流としている。そしてこの宗旨での正葬は土葬が基本であるからだ。

一般にこちらでは、葬儀の後、遺体は霊柩車で墓場に送られ土葬される。都会であればその霊柩車の後ろから親族・友人を乗せた10台、20台の車が黄色いランプを点滅させながらゆっくり続く。これを他の一般車が追いついたりするのは大変に礼を欠くことになる。死者を悼む心情は、仮にそれがまったくの他人であっても、人間として最低限のモラルであるからであろう。

ところで、葬儀の形態といえば、インドでは火葬のほか水葬もある。また、歴史的・文明的視点から見れば、エジプトのピラミッドに代表されるミイラ葬、未開民族の中では樹上葬、台上葬のような風葬もある。

この違いは、宗教そのものの教義や地域の慣習の違いからくるものだが、もう一つ別の角度から見れば、人々の生死観の違いを反映しているともいえよう。ともあれ、死者を悼む人間としての心情は、世界のどこでも共通である。ただ、葬儀の形態はその国その地域またその宗教によって変わってくるのである。

例えば、こちらに「香典」の慣習はない。パナマで亡くなった日本人の葬儀が執り行われたときのこと。在住の日本人のほか多数のパナマ人も会葬に参加していた。そのなかの一

人が、受付のテーブルの上の香典袋の小山を見て私に尋ねてきた。

「亡くなった人になぜお金を？」

もちろん、日本の伝統社会の中での背景や慣習の違いを説明することはできる。またその慣習が良いとも悪いとも言っているのでもない。でもこちらの人々が、日本人には当然と思っている慣習にも、素朴な疑問を抱いていることも事実なのである。

真夏のクリスマス

冷房車でプレゼントを配るサンタクロース

さて「冠婚葬祭」の「祭」については、ラテン・アメリカでは語るに尽くせない。元来がフィエスタ(お祭りまたはパーティ)好きの民族性である。国の記念行事あるいは地方の催し物とさまざまなフィエスタがあるが、中でも特に“ラテン・アメリカ的”と言ってよいのがカーニバルとクリスマスであろう。

カーニバルとは、ふだん食べている肉に感謝するというこれもキリスト教から出たお祭りである。2月の土・日曜日をはさんだ4日間、すべての官庁・会社も休みとなり街では「〇〇コンテスト」や仮装パレードが行われ、日本の阿波踊りよろしく人々は激しく踊りまくる。もっともこうした喧騒を嫌い「この間を静かな別荘で」と街を抜け出す一部の上流階級もいる。

それにしても、北半球の「冬」のある国に住んでいた者にとっては、南半球の真夏のクリスマスや正月はいまひとつピンとこない。最近では、ここも日本の例に漏れず、宗教的な儀式というより商業ベースによってそのムードが作られリードされる傾向が強くなりつつある。

12月、トナカイに代わって冷房の入った車でプレゼントを配ってまわるサンタクロース――。

かように自然のみならず「冠」「婚」「葬」「祭」の一つ一つが東洋と中南米の伝統や慣習の対比を映し出して面白。



宗教の未来像は？

仏教の哲理求めるラテン・アメリカの人々

15世紀末、コロンブスを初めとした“地理上の発見時代”から「新大陸」はヨーロッパ文化の流入と共にキリスト教の布教の大地ともなってきた。コロンブスが4回の航海を通じて毎回寄ったのがドミニカの首都サントドミンゴ。新世界最古と言われる教会にはその遺骨も葬られている。

以来、5世紀余にわたってキリスト教は社会の慣習また市民の生活の根底を形作るものとして浸透してきた。ちなみに中米の「エルサルバドル」とはスペイン語で「救世主」との

意味である。

カーニバル、イースター、クリスマスなどの年中行事もすべてキリスト教から来ている。憲法で信教の自由を認めながらも、基本的にはキリスト教が 国教と言ってもよい状況になっている国もある。このように程度の差こそあれ、キリスト教抜きで国家・社会秩序の形成は考えられないのである。だがその一方、その教義の一部非科学性からキリスト教に背を向ける若者が次第に増えてきているのも否めない傾向である。

「キリスト教は歴史的にも科学や天文学といくたびか衝突してきた」（サントドミンゴ大学学生）

「この世と人間の創造者は全知全能の神だという。ならば、なぜ身障者と健康者、豊かな家の子と貧しい家の子といった生まれながらにしての差別があるのか」（メキシコ・グアダラハラ大学学生）

「死に際し、この世の最後の時、つまり世界の終末が来て救世主が来臨（キリストの再誕）したとき“最後の審判”で信ずるものは救われ天国へ、信じないものは地獄へとと言われる。だが、その天国・地獄とはどういうものか自分には納得できない」（パナマ大学新聞学科学学生）・・・と若者が抱く疑問と批判は鋭い。

たしかにキリスト教が世界史のなかで果たしてきた役割は計り知れなく大きい。文化の発展、教育の振興、モラルの確立など社会に寄与してきたのも歴史的な事実である。

その一方で、サントドミンゴ大学の学生の声にみるまでもなく、コペルニクスやガリレイ等の科学者に対する教会の弾圧、科学との対立の歴史も消すことはできない。キリスト教の衰退は新しい科学、特に生物学や天文学との対立に起因していると言われるのもうなずける。処女懐胎、キリストの復活、天国の問題などいまなお論議の絶えないところである。

こうした教義の矛盾性によって、若者の間でキリスト教離れの傾向が出てくるのも必然の成り行きといえようか。しかも、11～13 世紀の十字軍を初め、何回かの宗教戦争にみる流血の歴史——。ここラテン・アメリカへの布教も概して征服と抑圧につながる歴史であった。

ラテン・アメリカへのキリスト教布教の特質を「3G」をあげ解説する学者がいる。

[GOSPEL(福音)]「GRORY(栄光)」「GOLD(金)である。富(黄金)を求めて新大陸にやってきた征服者たちは、ひざまづいてキリストの福音を称えると思うや、立ち上がると近代的武器を持って原住民に襲いかかった。かくして現代に神秘性を残すインカ文明やマヤ文明も歴史のかなたに消え去っていったのである。



今、アンデスのどんな小さな部落の中にもそびえるカトリックの教会は、地上での現世の生活をあきらめさず役割を果たしてきた面もあるようだ。そして「神」の支配のもとに置かれたラテン・アメリカでは、人々の心をも神が支配するものとなっていったのである。

よく仕事の交渉に際して知人との懇談のおり「シー ディオス キエレ」という言葉を

耳にする。「もし神が望むなら」または「神の思し召すまま」との意である。軽い意味で慣習的に使っているのかもしれないが、そこには自分の幸・不幸も、自分の行動、他人との約束の実行さえも神の意志にゆだね、自らの自発性、宿命転換への努力を忘れてしまった姿勢があるようにも思える。

こうした、仏教で言えば念仏に似たあきらめの人生への姿勢が、個人の幸福確立への道を阻み、社会の発展を妨げているのも一面の事実である。

その意味で今、ラテン・アメリカに、生命尊厳の哲理を説く日蓮大聖人の仏法が、広く人々の心に受け入れられ、またその教えを生活・社会に生かして希望に燃えて活動する SGI メンバーが増えているのは、歴史的また文明的な視点からも極めて意義が深い。